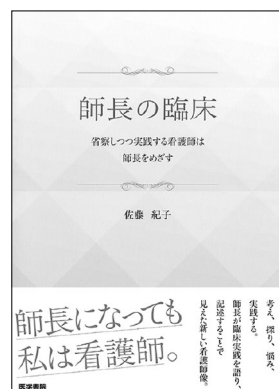


『師長の臨床 省察しつつ実践する 看護師は師長をめざす』 師長の「実践の知」を 明らかにした1冊

著：佐藤紀子／定価：本体2,000円＋税／
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



私は30年の臨床を経て大学教員になったが、その大半を病棟師長や看護部長として臨床の海を泳ぎまわっていた。30～40代の師長としての10年半、臨床で考え、探り、悩み、実践したエピソードを『それぞれの誇り 婦長は病棟の演出家』（ゆみる出版、1997）を師長の語りとして描いた。ここで私は「師長の臨床」を描きたかった。師長の仕事もケアであることを示したかった。師長としてのケアリングパワー（看護の力）は見えにくいからこそ、どうにか伝えたかった。

本書の著者は、「看護職生涯発達学」を確立し、研究者として実践の中にある看護の力を発信しつづけてきた佐藤紀子さんである。著者の研究と、院生たちとともにやってきた研究の成果をふまえながら、18年前に出版した『変革期の婦長学』のリニューアルである。時代が変化しても変わらない優れたジェネラリストである師長の「実践の知」を伝えている。

本書の構成は、序章「師長は優れた『実践家』である」、第1章「病棟の実践を変える、イノベティブな師長たち」、第2章「イノベティブな看護管理」、第3章「文学に潜む、看護の知の水脈から探求する師長の臨床」、第4章「新しい師長像を求めて」である。著者は「看護師が看護の責務が果たせるように変革を起こすことは、師長の責務である」ことを前提として、「師長が行うイノベーション

の構造モデル（改訂版）」を用いながら、師長ならではのイノベーションを彼らの語りのなかに見出している。

私と同時代を臨床家、看護管理者、教員として生きた著者は、これまで出会った大勢の師長たちの語りや文学に表れた第一線の看護管理者たちの姿のなかから、研究者として師長の実践の実相や臨床の知を長年発掘し続けてきた。看護師である師長の実践は複雑で複眼的で説明しづらい。しかし、人を気遣い世話をし命に働きかける専門職として、生涯をかけて学修し、実践し、思考し続けることを支援するための学問領域である「看護職生涯発達学」と「看護管理学」とを融合しながら紐解いていくことで、その実相が明らかにされている。

学生にこのことを伝えておくのが看護教育の重要な役割ではないだろうか。前校で私が担当した統合実習では、学生一人ずつ師長のシャドーイングをしていた。最終カンファレンスで、学生はこう感想を述べた。「師長がカンファレンスの時いつも言う言葉は『最善を尽くす』でした。師長は『看護師としての最善』だけでなく『師長として最善』を尽くしていることがわかりました。私はいつか師長という機能を果たすことがあっていいなと思いました」。省察しつつ実践する看護師であれば、いつか師長になることもあるだろうと学生は実感したのだろう。うれしかった。